

尾嶋史章編著：『現代高校生の計量社会学』：ミネルヴァ書房，2001年，A5判，242頁，3,600円

中村，晋介
福岡県立大学生涯福祉研究センター：教員：都市，規範意識

<https://doi.org/10.15017/942>

出版情報：人間科学共生社会学．2，pp.163-165，2002-02-15．九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

書 評

尾嶋史章編著

『現代高校生の計量社会学』

(ミネルヴァ書房, 2001年, A 5判, 242頁, 3,600円)

中 村 晋 介

本書のもとになったのは、1981年と1997年の2度にわたって兵庫県南東部に位置する高校3年生を対象にして実施された計量的調査である。本書の編著者である尾嶋史章氏は、1981年に兵庫県南東部において「高校生の生活と進路に関する調査」に従事した。それから16年後の1997年、尾嶋氏を中心とする研究グループは、かつての調査対象校にアクセスし、1981年度調査を基盤にした計量的調査（「高校生の進路と生活に関する調査」）を実施した。この2つのデータをつきあわせることで、高校生の進路選択や学校生活の状態、職業観などの社会意識に見られる変化（あるいは不変化）を計量的に把握することが、本書の第1目標である。

しかし著者たちの企図はこのような計量把握それ自体にとどまるものではない。計量的に把握されたデータはあくまで1つの判断材料にすぎない。本書の意図は、学校教育システムを含めた社会環境の変化が、「ごく普通の」高校生たちの「ごく普通の日常生活」に及ぼした全般的な影響を描出することである。

すなわち、基本的に計量的な調査法に依拠するものの、本書の執筆者たちは、分析を計量データにのみ内在させることを峻拒している。計量データから得られた分析結果と、著者らが日常生活や日々の研究活動において経験的に取得してきた社会的コンテキストの変化に関する認識や知識とをつきあわせた上で、著者たちは特定の解釈を提示しようとしている。

序章の執筆者（尾嶋史章）が婉曲的に述べているように、従来の計量的調査に基づく従来型の研究では、得られたデータそれ自体が「現実世界」の「何を映し出しているのか」という問題については必ずしも積極的／自覚的に捉えられてこなかった（7頁）。この弱点を回避するために、「計量的モノグラフ」と銘打たれた本書において、著者たちは単なるデータ分析による仮説の検証にとどまらず、一步を踏み込んだ分析、量的データと質的調査の架橋を試みている。

このような「計量的モノグラフ」において、著者たちが具体的に目指したものは、高度経済成長以後の経済状況の変化や教育カリキュラムの変化、女性の社会進出の高まり、政治や経済のグローバルイゼーションといった環境の変化が、わが国の高校生に与えた影響を描出することである。具体的には、①進路選択をめぐる意識やその決定要因に及ぼした影響、②職業観や学校生活感といった社会意識に与えた影響、③高校生の生活構造に与えた影響についての考察が本書では展開されている。

① 「進路選択をめぐる意識やその決定要因に及ぼした影響」に関しては、被調査者全体に

関する総合的な分析（1章：尾嶋史章、2～3章：荒牧草平）と、特に女子の意識に注目し、ジェンダー観や性別役割分業に対する意識などとの関連について論じた章が作られている（4章：吉川徹）。「ごく普通の」高校生たちの「ごく普通の日常生活」に及ぼした全般的な影響を描出することを目的とする以上、本書のこの構成は極めて手堅いものと言える。

- ② 「職業観や学校生活感といった社会意識に与えた影響」は、さらに2つの論点に下位分化される。その第1は、千石保の「まじめの崩壊」説——近年、若者たちの価値態度が、中・長期的に目的合理性を追求するものから、刹那的、局面依存的な「ノリ」を重視するものへと変化した（コンサマトリー化）という仮説——を統計学的に検証し、その虚構性を明らかにするものである（5章：轟亮）。今日「まじめの崩壊」説と近似した論調は、ジャーナリズムや教育関係者の議論の中で一般的な常識となっている観がある。このような「常識」に対して異議を申し立てている本章は、「常識破壊ゲーム」としての社会学的思考のおもしろさを読者に与えてくれる。

もうひとつの論点は、国歌や国旗の義務化や、歴史認識をめぐるアジア諸国との間に不協和音が起こり始めている近年の情勢を受けて設置された論点である（1981年度調査にはこの項目は存在しない）である。すなわち、現在の日本に住む高校生たちが抱くナショナリズムに焦点を合わせた論考である。この箇所においては、学力水準や生徒文化論、ジェンダーに関する議論と交錯させる形で、高校生のナショナリズムについて議論が展開されている（7章：金明秀）。

- ③ 「高校生の生活構造に与えた影響」は、高校生の「相談ネットワーク」（悩みを誰に相談するか）を手がかりに、高校生が作っているパーソナル・ネットワークのあり方、さらにそれと社会意識や学校生活感との関係が分析されている（6章：工藤保則）。この章も、データにのみ依拠するのではなく、ソーシャライザーとしての学校の価値低下といった社会的コンテキストの変化と関連づけた議論が試みられている。

既に述べたように、本書の方法論的な特徴は「計量的モノグラフ」の名のもとに、計量的調査で得られたデータと、社会的コンテキストに関して著者たちが得てきた質的データとの間を架橋した上で、その橋上で展開される往復運動の上から、一定の積なり知見なりを導くことであった。1～7章で提示されている実際の論考においては、架橋された橋の橋桁の強度にいささかの不安を感じるものや、橋桁の間隔が開きすぎているような感覚を受けたものもあったことは否めない。しかし、量的調査と質的調査を架橋する可能性を開いた点において、また計量的調査から得られたデータの取り扱いに関して重要な注意を喚起した点において、本書の試みには総合的に高い評価が与えられるべきだろう。

この方法論のもとに、「学校における生徒の下位文化が、生徒たちを一定の方向に社会化するという傾向が弱まっている」（206頁）ことが、現代のわが国における高校生たちの進路希望や職業志向、学校への帰属意識、パーソナル・ネットワークなどに影響を与えている様子が本

書では描き出されている。また、現在の若者世代に見られる「判断留保」という態度を引き出している過程についても、説得的かつ堅実な議論が展開されている。

今日、わが国の教育現場では、「進路未定」のまま高校を卒業する生徒が急増している。またテレビの討論番組などでは「生きる意味が見つからない」と苦悩する若者たちの姿が頻繁に放映されている。こういった現状を前にした時、本書で提示された図式の持つ重要性は極めて高いものといえるだろう。本書で提示されている論考には、これらの問題に対する処方箋のヒントとなるポテンシャルを秘めたものが各所に見られる。本書執筆者たちのさらなる研究の進展、本調査のデータをもとにした次なるアウトプットの刊行が待たれるところである。

最後に、ナショナリズムの把握に関して周到な指標を構築し、ジェンダーや学力水準との関係を調べようとした7章の試みがいささか不発に終わった——これは本執筆者自身も認めている（199頁）——こと、また7章の内容と他の章との関連付けがいささか薄くなってしまった点は、いささか残念な結果であった。近年の日本では「「インターナショナルなもの」を獲得するためには、事前に「ナショナルなもの」を確立する必要がある」という論理で武装した、一種のネオ＝ナショナリズムというべき思想が急速に支持者を集めているように見える。この点において、この7章で提起された視角は極めてタイムリーなものだったと言えるだろう。ナショナリズムの定義や測定法に関する再検討をも含める形で、7章で使用されたデータをもとにした、更なる分析に特に期待するものである。